

古びたドアはイギリスのパブを模しているらしい。イギリスに行ったこともなければ、パブとバーとスナックの居酒屋と違いもわからぬ私には、ただ単なる外国風の木製のドアでしかなかった。

押し開けると、からんからん、とドアに取り付けられたカウベルが乾いた音を鳴らした。

静かに、ヴァイオリン曲が流れている。落ち着いた木造の内装。手前には五人しか座れないカウンタ席。その奥には、四人がけのテーブル席が七つばかり並んでいる。カウンターのすぐ脇にはアップライト・ピアノが置かれ、ちよつとしたステージになっていた。時々、クラシックやジャズのミニ・コンサートが開かれることもある。

バー・カウンタの向こうに、いなくまじん稲熊仁の姿があつた。

「おや、こんなに早く、珍しいじゃないですか、大尉殿」

稲熊は、すでに頬と鼻の頭を赤くしていた。髪はほとんど残っていないのに、鼻から下は半白の髭で覆われている。

「酔っているのか。まだ朝の十時過ぎだぞ、稲熊飛曹長」

「一日の活力の源でありますっ」

そう言い、稲熊はブランデーのロックが入ったグラスを口にした。

ここは喫茶店だが、夜には——夜でなくても——酒を出す。店の名前は〈ブルー・カーバンクル〉といった。

壁一面に、肖像画というか、鉛筆で描かれたイラストのようなものが貼られている。それらはすべて、稲熊が描いたものだ。

「朝から店主が酔っぱらっていたら、来る客も来ないだろうに」

私はカウンタの端の止まり木に腰をかけた。稲熊は、私の注文も訊かずにジョッキにギネスを満たし、私のほうへ突き出した。

カウンタの入り口側の端には、チラシが何種類か積まれていた。ここで開催されるミニ・コンサートの告知だろう。

「いえ、現に大尉殿がいらつしやつたじゃありませんか」

稲熊は自分のグラスにブランデーを注ぎ足し、眼の前に掲げた。

「死んでいった者と、これから死にゆく者に、乾杯」

私もジョッキを掲げた。ギネスを一気に半分ほど飲み干した。冷たく、苦く、やや甘い液体が胃の腑へ落ちていく。

『『ご遊び』はやめにしよう。今日は稲熊飛曹長ではなく、名探偵殿に会いに来たんだ』

そう言うと、稲熊は髭面いっぱい笑顔を見せた。

「ほう、そりや面白そうだ」

稲熊は変わった男だった。かつて、海軍航空隊の基地内で、隠し持った英語の探偵小説に読みふけていた姿ばかりが思い出される。

この店の壁を埋め尽くす彼のイラストは、シャーロック・ホームズの登場人物なのだという。ホームズにワトソン博士、モリアーティ教授、レストレイド警部——さらに、女性の肖像もあった。さんざん稲熊に講釈され、いつしか私も、アイリーン・アドラーとかメアリ・モースタンとかヴァイオレット・ハンターといった名前を覚えてしまった。

店の名の〈ブルー・カーバンクル〉という言葉もまた、シャーロック・ホームズゆかりのものらしい。稲熊は「『青い紅玉』のことですよ」と言い張る。私が「『紅玉』なのに『青い』とは、矛盾している」と、まっとうなことを言うと、子どものように頬をふくらませて怒るのだ。

私はギネスを飲み干した。すかさず稲熊がジョッキを取り上げ、二杯目を注いだ。

「実は、知り合いが亡くなった。殺しだ」

「殺し？」

稲熊が身を乗り出す。その弾みでジョッキのギネスがカウンタに跳ねた。

私は「どうもおばさん」こと伊崎菜穂子との出会いとその死について、簡単に説明した。

「名探偵殿の推理は？」

稲熊はかぶりを振った。

「ホームズだろうがポワロだろうが明智小五郎だろうが金田一耕助だろうが：

…たったそれだけの手がかりじゃあ、犯人なんぞわかりやしませんよ。しかし、出来の悪い『フーダニット』なら、犯人は施設の管理人か、公園にいたミュージシャンのあんちゃんだな」

「ほう、なぜ？ 動機は？」

稲熊は、何杯目かのブランディを口にした。

「そんなことはわかりません。でも、大概、そういう展開になるのが、探偵小説のお約束」

「管理人は、そんなことをするような人じゃない。それに、殺す理由もない。公園にいた青年には、事件当夜のアリバイがある」

「もつとも善人に見える人間が、実は意外な真犯人だった、というのが『探偵小説』ですよ。アリバイなんて、なんとでもなる。一度、二人を東尋坊にでも連れて行ったらどうです？」

「東尋坊？ 福井県の？」

「断崖絶壁の上だったら白状するかもしれませんよ。テレビのサスペンス・ドラマみたいな」

「我がホームズ君に訊いたのが間違いだったようだ」

私はジョッキを突き出し、稲熊は三杯目のギネスを注いだ。

「ところで、今、〈石原組〉はどうなっているか知っているかね？」

尋ね、ジョッキのギネスを半分ほど一気に飲み干した。稲熊は口に持っていきかけたブランデーのグラスを止めた。その視線が、つかの間、宙を泳いだ。

「〈石原組〉？ 大尉殿、酔いましたか？」

「まさか。もつと強いものをくれ」

私は三杯目のギネスを飲み干した。稲熊は、私の名札が下がったボトルを棚から取った。

ショット・グラスにスコッチ・ウイスキーを注ぐ。〈ジョニー・ウォーカー〉の黒ラベル。チェイサーはなし。ウイスキーの味の違いなどわからない。単に、かつて「ジョニ黒」が憧れだった年寄りの感傷に過ぎない。

「それは名探偵の仕事じゃありませんな。ただの情報屋だ」

稲熊は言い、自分のグラスにブランデーを注ぎ足した。

「大尉殿、いい加減、歳相応に枯れたらどうですか？ おとなしく、静かに短い余生を過ごすことはできないんですかね」

「できれば、私もそうしたい。実は、言い忘れていたが、昨夜〈石原組〉の若い衆に襲われた」

「何ですって？ そいつを先に言っておきなさい。どうしてまた連中と……もう石原英紀は死んで、とつくに代替わりしたでしょうに」

私はジョニー・ウォーカーをなめた。

「伊崎さん——『どうもおぼさん』の亡くなった公園だよ。孫娘と一緒にいたんだ。助けられないわけにいかないだろう」

「で、怪我は？」

「無事じゃなかったら、こうやって朝から呑んではない」

「いやいや、大尉殿のことは心配してませんよ。相手の若い衆は？」

「指を二本ばかり」

「落としてやったんですか？」

「冗談じゃない。折っただけだ」

稲熊は、心底呆れたといった表情で肩をすくめた。が、その顔には楽しんでいろいろも見えた。

「おかしな話ですね。障碍者の殺人に、〈石原組〉が出張でばってくるなんて。もつとも、今じゃ横文字の看板なんか掲げているようですがね」

「〈アイ・インヴェストメント〉だ。越おさか阪部刑事から聞いたよ。連中は今、何でシノいでいるんだろうか。今どき、売春や賭博でもあるまい」

「ほう、越阪部のあんちゃん、まだ現役でしたか」

稲熊は、にやにやしなから、私のショット・グラスにジョニー黒を注いだ。

「あんちゃんという歳じゃない。奴ももうすぐ還暦だ」

「〈石原組〉といえば、バブルの頃は総会屋とツルんだり、企業舎弟として結構な名を馳せてましたよ。しかし、今じゃあ、昔のシマが中国系とかロシア系なんかにはさんざん荒らされちまって、いつときはシノいでいくのがたいへんだったよう

ですがね」

「ずいぶん詳しいな。それで、今は？」

稲熊は首をかしげた。

「三代目の英洋が、なかなかのインテリでしてね。バブル崩壊をうまく乗り切れたのは、『経済ヤクザ』の素質があつた英洋の力が大きいそうです。傘下の二次や三次の組は、違法カジノやったり、デリヘルやったり、産廃にからんだり……もっと下の組では、『振り込め詐欺』なんかをしているそうです。長女のなんとかいうのは、先代からつながりのある中堅建設会社（堀田建設）の社長夫人です。が……三代目が表立って何をしているのかは、情報が入ってきませんね。傘下の組から吸い上げたカネで先物取引やつてるとも聞きますが」

「デリヘル……というのは、何だね？」

稲熊は、口に含んだブランデーを吹き出しそうになった。

「大尉殿、やはり、もう時代は変わったんですよ。我々年寄りの出る幕はないんです。『デリヘル』というのはデリバリー・ヘルス。簡単に言えば、コール・ガールというか、出張売春です。今は、風営法が厳しくなって、店舗型の風俗は新規開店ができないんですよ」

私のグラスがいつの間にか空になっていた。間髪入れず、稲熊がジョニ黒を注ぐ。

「つながらないな。なぜ、昨夜は私と孫を襲つたのだらう？ 連中は、伊崎さんの死について何か知っていた。なぜ今度の事件から『手を引け』と脅さなければいけないのか……？」

私は、グラスのなかの琥珀色の液体を見つめた。

いつも謝ってばかりいて、サヴァン症候群だった伊崎菜穂子の死。

経済ヤクザとして、今でも裏の社会でそれなりの地位を築いているらしい（石原組）。

からんからん……とカウベルが金属的な音を立てた。

若い女性が入ってくるころだった。

「こんにちは。あ、ごめんなさい。早すぎましたか？」

「いや、構わないよ、カナエちゃん」

痩せて色白だが、唇だけがやけに紅い。ほぼ江美と同じくらいの歳だろう。私には下着にしか見えないようなもの——江美に教わったが「キャミソール」といつて、実際、以前は本当に下着だったらしい——に丈の短いジーンズ姿。

彼女は私を一瞥すると、微笑を浮かべて頭を下げた。私も会釈を返した。

稲熊が言った。

「あ、カナエちゃん、こちらは僕の上官殿」

「ジョーカンドノ？」

「若い頃には一緒に悪さをした仲なんだ」

稲熊が言うのと、彼女は屈託なく笑い出した。

「信じられない。マスターが『悪さ』してたなんて」

「特攻の出撃の前日に玉音放送があったんだ。そりゃあ、愚連隊にもなるさ」

稲熊は言ったが、彼女には「トッコー」も「ギョクオンホーソー」も「グレンタイ」も、外国語のように理解できなかったようだ。

それも当然だ。その時代のことは、有里子や江美にも話していない。

とりあえず名を名乗った。彼女はにっこりと笑って、頭を下げた。

「わたし、横澤かなえといいます。音大で声楽勉強してて、こちらのお店で、ライヴやらせていただいたり、時々、練習させてもらっているんです。今日も、ピアノの練習をさせてもらいに来たんです。マスター、いいですよね」

「ああ、構わないよ」

横澤かなえ——カナエちゃん。私の記憶力もさして衰えてはいないようだ。

横澤かなえはアップライト・ピアノの前に座ると、椅子を調節し、鍵盤の上に指を置いた。一つ深呼吸すると、ピアノがメロディを奏で始めた。

音楽に詳しくはない。が、昔、否応なく何度も聴いた。特に好きというわけではないが、懐かしい。いろいろな思いが去来する。

あの当時に戻りたい、とは決して思わないが、「イン・ザ・ムード」のピアノ版を聴くことは、悪くない。

弾き終わると、横澤かなえは少し恥ずかしそうな顔をして、私と稲熊の顔を見

た。

「次のは新曲なんだけど……感想聴かせてもらえますか？ 次のライブでやるんです」

不意に、横澤かなえは眼を閉じ、その表情が一変した。指先が鍵盤の上を走り、切ない導入部を奏でると、彼女は静かなメゾ・ソプラノの声で歌い始めた。

止まった時計のように

引き裂かれた絵のように

石くれのように

あなたは眠る

砕けた水晶のように

明日を知らぬ子のように

かわらけのように

あなたは眠る

芸術などと無縁に生きてきた無粋な私ですら、この歌は、今はいない人への哀悼を歌ったものであることはわかった。彼女のようなか細い体から、どうすればこれほど透き通った声を出すことができるのか。

横澤が歌い終えるや否や、私は我知らず、拍手をしていた。そして、そんな思いもかけぬ自らの行為に、私自身が少々狼狽してしていた。

歌い終えた横澤かなえは、ピアノの前に立つと、芝居がかった仕草で私と稲熊に向かつてお辞儀をした。

稲熊も拍手し、大きく何度もうなずいた。

「いやあ、いいよ、かなえちゃん。あと十年たつたら、マリア・カラスも夢じゃない。カラスは自分で曲を作りはしなかったけれどね」

私は、ただ「カラス」が鳥の「鴉」ではない、ことだけしか理解できなかった。

「この歌、まだメロも全然よくないし、もつともつと練習しなきゃ、ライブで聴

かせられないです」

横澤かなえは、恥ずかしそうに肩をすくめた。

いつの間にか空になつていたグラスに、稲熊がジョニー・ウォーカーを注ぎ足していた。私はそれを口にもつていき、彼女の歌を脳裏で反芻していた。

題名は、「寄る辺なき者への挽歌」といった。

「横澤さん、君は、美山良則君と一緒にバンドをやっているんだね」

「えっ？ どうしてノリやんのこと……？」

私は孫の江美のこと、そして公園で美山と出会ったことを話した。

「へえ、江美ちゃんのおじいちゃんだったんですか。すつごーい。世間って狭いですね」

「そうだね、世間は狭い」

この世界というものは、狭すぎるほど、狭い。そして、その狭い世界のなかで、思わぬ形で人と人はつながり、そして、悲劇を生む。

「わたしたち、ヘフォー・ザ・レスト・オヴ・アス」というバンドなんです」

そう言つて彼女は、稲熊の描いた「セバスチャン・モラン大佐」と「ロイロツト博士」——どちらもシャーロック・ホームズに登場する悪役らしい——のイラストの間に貼られたチラシを指さした。

FOR THE REST OF US——「その他の人びとのために」とでも訳すのだろうか。

「さすが、美しい曲だね。かなえちゃんの声だからこそ、胸に沁みるんだろうなあ」

「ありがと、マスター。えつと……江美ちゃんのおじいちゃんは、どうでした？ お世辞とかお追従とかじゃなくつて、シビアなご意見訊かせて欲しいんです」

横澤かなえは、ずいぶんと生真面目な性格のようだ。大雑把な江美とはかなり違う。

「いい歌だった。しかし、ずいぶんと哀しい歌だ」

横澤かなえは、すぐさま顔を上げて笑みを見せた。

「泣ける曲を書きたいな、とずつと思つてたんです」



「泣ける曲？」

「ええ。ライブでも、みんな泣かせますよ」

横澤かなえは胸を張った。

「コンサート……いや、『ライブ』というのかな？ 江美と一緒に聴きに来るよ」

「ありがとうごさいます！」

横澤かなえは、やや大袈裟にお辞儀をした。

私はグラスの底を見つめた。わずかに残った琥珀色の液体を飲み干した。

「マスター、また夕方にもう一度、ピアノ借りに来るね。そのときには友だちも連れてくるから、みんなにビール一杯くらいおごってね」

「ああ、待ってるよ」

横澤かなえは、私に向かって一礼すると、〈ブルー・カーバンクル〉から出て行った。カウベルが、乾いた音を立てる。

私も退散しようと止まり木から降りると、稲熊が一冊の文庫本を差し出した。

「今の歌を聴いて、思い出した小説があるんです」

「シャーロック・ホームズかね？ ならば、すでに全巻読破した——いや、させられたじゃないか。もつとも、中身は何一つ覚えていないがね」

「ホームズじゃありません。アメリカの作家の書いたハードボイルド小説なんです。今回の事件をちよつと思ひ出させるところがあるんです。ある女性のホームレスが殺される。誰も悲しまないし、誰も気にしない。警察だって、まともに捜査なんかしない。ひよんなことから主人公の私立探偵が、その事件を追うんです……」

「伊崎さんはホームレスではなかった。それに、彼女の死を悲しむ人は大勢いる」「この小説では、探偵がいろんな人に、被害者のホームレスについて訊いて回ります。そして、今まで誰にも相手にされていなかった被害者が……」

「伊崎さんは、誰にも相手にされていなかったわけではない。多くの人に慕われ、愛された人だった。孫の江美も、〈むすびの家〉の代表も——」

「それから大尉殿も、ですか」

一瞬、返答に窮した。

私は、「どうもおぼさん」——伊崎菜穂子の死を哀しんでいるのか？ 顔を合わせた回数は片手で数えられる程度だ。私はどこまで彼女のことを知っているというのか。

FOR THE REST OF US——その他の人びとのために。

伊崎菜穂子という人間は、誰にも顧みられることがなかったのか。彼女は、「その他の人びと」だったのだろうか。

「REST」には、確か「残り物」といった意味もあつたはずだ。

取り残された人びとのために——

「彼女は、決してみんなに見捨てられた人ではなかった。取り残された人ではなかった。そんな人であつてはいけなかった……」

「大尉殿、酔ってますね」

「この程度のジョニ黒で酔うものか。失敬だぞ、貴様は。で、誰なんだ？」

「えっ？ 何がですか？」

「犯人だ。誰が、彼女を殺したんだ、稲熊飛曹長？」

稲熊は大きくため息をついた。

「それは、ご自分で読んで確かめて下さい」

赤い背表紙の文庫本を、稲熊は私に突き出した。私は受け取ったが、少々分厚いのでそのままズボンのポケットには入らなかった。半分に折り曲げ、尻のポケットに押し込んだ。

「大丈夫ですか、大尉殿。足元がおぼつきませんが——」

「貴様の指図は受けん！ 伊崎さんを貶めることを言う輩は、貴様であろうと許せん」

視界がぼんやりと赤みを帯びているのを感じた。一步踏み出そうとして、足がもつれた。尻もちをついた。天井が揺れる。

「大尉殿……」

稲熊に向かつて「向こうへ行け」と手を振り、私は自力で立ち上がった。

〈ブルー・カーバンクル〉のドアを引き開け、カウベルの音を聞きながら。外に出た。

陽光がまぶしい。ひどく、ひどくまぶし過ぎる。

ソファに横たわって、稲熊から受け取った文庫本を手に取った。ジョニ黒の酔いはとうに醒めていた。

文庫本は、ローレンス・ブロックという作家の短編集だった。稲熊の言及した小説は、最後に掲載されていた。「バググレイディの死」——原題は「LIKE A LAMB TO SLAUGHTER」——「屠殺される羊のように」、直訳すれば、そうなるのだろうか。

読み終えて、しばし天井を見上げた。私は探偵ではない。ただの老いぼれだ。もともと、私の出る幕ではなかったのかもしれない。

不意に、自宅の電話が鳴った。私以外には誰もいない。大概がセールの電話なので、普段は居留守を使う。だが、なぜかそのときは受話器を取った。

若い男の声だった。

「あの……公園の人殺しを調べてるっての、おたくつすね？ 名前は……勘弁して下さい。実は、俺……あ、いや、僕、見たんです。事件のあった夜、十時四十五分くらいかな。二人が喧嘩しているような様子を、遠くからですけど、見たんです。男と女か、女同士か、それはよくわかりませんでしたけど」

「どうして、それを私に？ 警察に証言すればいいでしょう」

「それがちよつと……旦那のいる女と会う日だったもので……名乗れないんです。俺の友だちが、たまたま『ブルーなんとか』っていうバーの常連で、そのマスターから、おたくが事件の調査をしてるって聞いて、連絡先教えてもらった、ってわけです」

新聞の報道では、伊崎菜穂子の遺体が発見されたのが十一時だ。その直前に争う二つの人影。

「ありがとう、たいへん参考になりました」

「俺、こんなことするガラじゃないけど……。正直、メンドクさいし、たかが障碍者が一人殺されただけじゃないですか。俺に関係ねえし、どうだっていい、そう思ってたんです……。けど、何なんですかね？」

「何、というと？」

「この感覚、何なんですか？ 俺があんとき声かけてれば、とか……なんか、いろいろ考えるんすよ。罪悪感つーか……。俺、おかしいつすかね？」

「そんなことはない。たいへんに正常ですよ。ありがとうございます」

「お礼言われること、俺、何もしてないつすよ。ただ……捕まえて下さい、犯人を」

「わかりました。約束します」

私は受話器を置いた。もう一度、天井を見上げた。

ほぼ同時に、ポケットのなかで何かが震えた。携帯電話だ。江美からのメールだった。

——今すぐむすびの家に来て！

いつも多用している「絵文字」とやらが、まったくくない。

これは、ただごとではない。

壁の時計は午後三時過ぎを指している。昼食を摂っていないことに気づいたが、食欲はなかった。

キッチンへ行き、安ウイスキーをグラスに三センチばかり注ぎ、一気にあおった。家を出た。

〈むすびの家〉の前の道に着くや否や、異変に気づいた。

七、八人が、〈むすびの家〉の前——代表の内田の自宅の塀の前に立っていた。

その人垣をかき分け、塀の前へ進んだ。

何枚かの張り紙——一枚は、週刊誌の記事の拡大コピーであることはすぐにわかった。今度は、隣家——泉嘉次郎邸の白壁ではなく、〈むすびの家〉の塀に直接貼られている。

私は塀に近づいた。

——地域住民が恐れる障害者殺害事件の犯人とは？

と大書された見出しが眼を引く。

老眼鏡をかけて記事内容を読むうちに、胸の奥に何かがべったりとへばりつき

つつあるのを覚えた。記事内容は「犯人とは？」という題名とは大きく異なっていた。

——たった一つの知的障害者殺害事件が、地域住民に大きな不安を駆り立てている。○六年四月に施行された「障害者自立支援法」では、「身体」「知的」「精神」の三傷害が一つの基準で統一された。そのため、「知的」「精神」障害者を受け入れていなかった施設もまた、拡充、増築などを行ない、そのために地域住民とのあいだに軋轢が起こっている事例も少なくない。そんななかに起きた、今回の××県××市での知的障害者A子さん（41）殺害事件。犯人はいまだ不明だが、それ以上に、障害者と健常者がともに暮らすことの難しさが浮き彫りになっている。

視界が揺らぐような気分になった。血液内に残っている酒精のためか。

——Aさんが通っていた施設近隣の住民の一人はこう語った。「私たちは障害者との共生に反対などしていません。しかし、通学中の小中学生が声をかけられたり、夜間に大声でわめくなどの迷惑行為があつて、日々、不安な生活を送っていることを忘れて欲しくないんです。まして、殺人事件なんて、施設がなかった頃には絶対にあり得なかったことです」。

このようなトラブルは後を絶たない。今年一月、東京都××区の障害者福祉施設に通う精神障害を持つ二十一歳の男が、小学五年生の女兒を殺害した事件は記憶に新しい。また、日本全国で、知的・精神障害を持つ患者による、子どもや女性への「声かけ」や猥褻行為の報告は引きも切らない。障害者施設近隣に住む住民たちの不安は一向に……

隣を見た。同様に拡大コピーされた紙が、数枚貼られていた。

見慣れない文章の書き方だった。子どもの落書きのような雑文でも、私にとって理解不能に思える単語でも、活字体でプリントされていると、何か意味を持っているようにも見える。

少し考えて、やつとわかった。これが「インターネット」という代物なのだろう。

「名無し」と名乗る存在自体が自己矛盾した者どもが、薄汚く、軽薄で、稚拙で、どす黒い悪意に満ちた悪口雑言——あるいはガキの口喧嘩——程度の言葉をまき散らしていた。

——シンショー一人殺されて騒ぐバカもシンショー

——てか、少しだけ税金の無駄使い減るからラッキーW

——ワロタ

——殺された身障の女、ウリしてたってマジ？

——超キモイ

——百万もらってもやりたくねーしWWW

——身障にしかやらしてもらえねーやついるんだよな

それ以上読むことができなかった。引き剥がした。ざわめきを背後に聞いた。

そのまま紙をつかんだまま、隣の白壁づたいに歩いた——大仰な門。

インタフォンのボタンを押した。

女性の声が「どちら様ですか」と問うた。私は名乗った。

「嘉次郎に会わせていただきたい。奴に私の名を伝えてくれればいい」

「……お、お待ち下さい」

戸惑いを含んだ女性の声。おそらくは家政婦であろう。

待った。その時間がいらだたしいほど長かった。背中から聞き慣れた声が呼び

かけた。

「おじいちゃん……」

蒼白な表情の江美が立っていた。両の拳を力一杯握りしめ、ぶるぶると震えているのが見て取れた。

「江美、下がっていないさい」

「いやっ！」

かたくなな声と表情。私が何を言っても無駄なことは、孫の双眸を見れば一瞬で理解できた。

「わかった。しかし、口を挟むんじゃないよ」

返事はなかったが、私はそれを「了解」という意味だと、勝手にとらえた。

ぎい、という重い木の扉がゆつくりと開いた。邸内に招じ入れられるのかと思いきや、そこには長身瘦躯の男が立っていた。年の頃は四十代後半か。もつと上かも知れない。仕立ての良いスーツ。細面で細い眼に薄い唇。泉嘉次郎とは似ても似つかない。現職参院議員である息子ではないだろう。

男は名刺を私に差し出した。

——堀田建設代表取締役社長 堀田慎一

「どのようなご用件でしょうか？ 私が代わりに承ります」

「あんたじゃ話にならない。あんたは何者だ？」

「泉先生にはたいへんにお世話になっておりますので、何かご用でしたら、私がお伝えします」

「社長さんを使いつ走りに使うとは、嘉次郎も立派になったものだな」

そのとき、脳裏をかすめる何かがあった——〈堀田建設〉。

この街に本社を置く中堅の建設会社だ。県議を務めた泉嘉次郎と懇意であつてもおかしくはない。しかし、何かほかにあつたはずだ。酒精で淀んだ頭では、思ひ浮かばない。

突然、江美が私の手から紙の束を引ったくつた。そして、堀田社長に突きつけた。

「じゃあ、ちゃんと伝えて下さい。こういう嫌がらせをするのはやめて下さい、つて」

「それは私も見ましたよ。ひどいイタズラをする人間もいるものです」

「イタズラ？ 何言ってるのよつ？ 悪質な誹謗中傷じゃない！ 内田先生のところへ行つて、ちゃんと謝りなさいよつ」

堀田社長は、苦笑いを浮かべると、内ポケットから煙草を取り出した。見慣れぬ銘柄だ。おそらく外国の煙草だろう。金色に光るライターで火を付けた。

「どうして謝らなければいけないのかな、お嬢さん？ 警察を呼びますよ」

「ああ呼ばばいいよ！ あんたたちが何をしたか、全部喋っちゃうから！」

なんて孫だ。私は江美の肩をそつと抱いて、背後に押しやった。

私は一步前へ踏み出した。じつと相手を見つめた。堀田がたじろぐのがわかつ

た。

「無論、嘉次郎本人がやったとは思っていない。こんな汚れ仕事に手を染める奴じゃない。あんた自身がやったとも思っていない。不服があるなら、警察を呼べばいい。しかし——」

私は江美からプリントを取り返すと、堀田に押しつけた。

「もう一度、孫に手を出したら、ただではすまない」

「おじいちゃん？」

江美が怪訝そうな表情になる。

「何のことでしょう？」

堀田は煙草の紫煙を吐き出した。平静を装っている。

「あんたが、泉嘉次郎に義理立てしなきゃいけないのはわかる。が、あんたのところの若い衆を使つて、夜陰に紛れて——というのはいただけない。嘉次郎もヤキが回つたものだ。昔なら、そんな汚い手は使わなかった」

「な、何のことか……」

「おっと失礼、『あんたのところ』ではなかったな。あんたの嫁さんの『実家』に訊いてみたらいい。〈石原組〉に」

言い捨てた。江美に向かつてうなずいた。歩きかけ、もう一度振り返つた。玄関前に、呆氣にとられた面持ちで、くしゃくしゃのプリントを握つた堀田が、殺氣立つた表情で私を見返していた。

「私が、孫を守る。私が〈むすびの家〉も守る。そして、伊崎さんを殺した犯人も見つける。あんたたちには、決して邪魔をさせない」

堀田慎一は、紙くずを手にしたまま、口を半開きにして突っ立っていた。

〈ブルー・カーバンクル〉は、ほぼ満員だった。立ち見の客もいる。私と有里子、江美の三人は、アップライト・ピアノのすぐ横のテーブル席に着いた。奥のテーブル席に、〈むすびの家〉の内田の姿も見えた。会釈すると、内田も挨拶を返してきた。その隣には七、八名の若者。見覚えがある。〈むすびの家〉のヴォランティアと施設利用者たちだ。



私はすでに三杯目のギネスを半分ほど空けていた。下戸の有里子はオレンジ・ジュース。江美の前には、ソルティ・ドッグ。すでに二杯目だ。誰に似たのか、江美も酒に強かった。

ふと、カウンターの端に、明らかに異質な二人組が座っているのが見えた。

世界のすべてを敵視している蛇のような眼——堅気ではない。一人は、片手に包帯を巻いていた。

稲熊も二人の正体には気づいているようだった。

やがて店内の照明がゆつくりと薄暗くなり、四人の若者がステージに上がった。マスターの稲熊が、芝居がかった口調で紹介する。

「お待たせしました。〈フォー・ザ・レスト・オヴ・アス〉の諸君です」

拍手が起こり、〈レスト〉のメンバーたちは、それぞれの楽器のチューニングを始めた。

まずは静かなピアノ・ソロの曲から始まった。二曲目は、イングリッシュ・ホルンの美山良則が弾いてくれたドヴォルザークの「家路」——「遠き山に日は落ちて」。歌うのは、ピアノの横澤かなえだった。

知っている曲も、オリジナルの曲もあった。静かな曲もあり、アップテンポな曲もあった。いずれも四人それぞれが出しやばりすぎず、確実に互いに調和し合っ、音楽でひとつの世界を作り上げていた。

コンサートの最後に、美山良則が立ち上がり、言った。

「今日、最後の曲になってしまいました。僕らの新曲です。『寄る辺なき者への挽歌』」

美山が合図し、横澤のピアノがイントロを弾き始める。彼女の透き通った歌声が、〈ブルー・カーバンクル〉全体に広がった。

止まった時計のように

引き裂かれた絵のように

石くれのように

あなたは眠る

砕けた水晶のように

明日を知らぬ子のように

かわらけのように

あなたは眠る――

にこにこ満面の笑みを浮かべ、稲熊が彼らの演奏を見守っている。

内田充が、眼を閉じて聞き入っている。

その隣の東野繭は、横澤かなえと声を合わせて一緒に歌っていた。

眼を上げれば

落ちていく太陽

振り仰げばそこに

清い月

ずぶ濡れの猫のように

散り急ぐ花のように

踏みつけられた草のように

よるべのないあなたよ

曲が終わると、一瞬の静寂の後、割れんばかりの拍手が店内を震わせた。江美も有里子も一心に拍手している。驚いたことに、〈石原組〉のチンピラまでが、やや表情を和らげている。さすがに拍手はしていなかったが、指を二本も折られているのだから、やむを得ないだろう。

美山良則が立ち上がり、深々とお辞儀をした。

「僕らに音楽の楽しさを改めて教えてくれた人が、先日、亡くなりました。今の歌を、その方に捧げます」

そう言った瞬間、横澤かなえが、深くお辞儀をした。真つ先に〈むすびの家〉の東野彌が手を叩いた。再び、〈ブルー・カーバンクル〉は拍手に包まれた。横澤かなえは、いつまでも頭を下げ続けていた。その両肩が震えているのは、泣いているからなのかもしれない。

美山良則たちと談笑を始めた江美たちを残し、私は一人で店の外に出た。心配そうな稲熊の顔が視界の片隅に見えた。

ひんやりとした夜気に包まれると同時に、背後に人の気配を感じた。振り返らずに、私は言った。

「店の中で暴れるのかと思つたが、最低限の礼儀は持っているようだな」

「爺さん、言葉に気を付けな」

〈石原組〉のチンピラだ。

「ずいぶんと電話とは物言いが違うじゃないか」

私はそう言いながら、ゆつくりと振り返つた。手に包帯を巻いた男――私に指をへし折られた男――が、ぎくり、とした面持ちになった。もう一人は、怪訝そうな表情だつた。

「爺さん、いいのかよ？ 殺しの犯人、捜してるんじゃないのか？」

「ああ、しかし、終わった」

少しの間、沈黙が落ちた。

「俺らは……見たんだ」

指を折られた男が言った。

「それは、あんたからの電話で聞いたよ」

男は一瞬、息を飲んだ。そして、言葉を選ぶように続けた。

「違う。犯人を見たんだ、たつた今。今日、ここで」

「私もだ」

二人のチンピラは、言葉を詰ませた。

「ど、ど、どうすんだよ？」

「おまえたちこそどうする？ 泉嘉次郎の使いっ走りになって、〈むすびの家〉

への嫌がらせを続けるつもりか？」

「俺らは殺す気なんてない。ただ、施設のシンシヨードもをビビらせて、あそこを辞めさせて、施設をつぶすつもりだった」

「おまえたち、自分自身をくだらんと思わないか？ 自分を恥じないか？ 今の歌を聴いて、何を感じた？ 他の客の姿を見て、何を感じた？ 今夜の〈むすびの家〉の幸福そうな人たちを見て、何を感じた？」

返答はなかった。私はそのまま黙って歩き始めた。

「おい、じじい、待てよ！ 俺ら……俺ら、どうすりゃいいんだよ！」

「自分で考えろ。その程度の脳味噌と度胸は持ち合わせているんだろう」

私は歩き続けた。チンピラたちは追ってこなかった。

翌朝、木刀の素振りを二百七十四回まで終えたところで、江美が庭に駆け込んできた。

「おじいちゃん……今、ノリやんから電話があつて……」

半分泣きそうな声で、携帯電話を握りしめている。

「自首したのかね？ 横澤かなえさんが」

江美が息を飲み込んだ。

「知ってたの？ どうして？ いつ？」

「昨日のコンサートだよ」

〈むすびの家〉の人たちが、「寄る辺なき者への挽歌」を事前に聞いたはずはない。しかし、昨日のコンサートでは、東野繭が声を合わせて歌っていた。

誰が教えたのか？ それは、伊崎菜穂子の他にあり得ない。伊崎菜穂子が、あの公園で横澤かなえと会ったことがあるのだ。〈サヴァン〉だった伊崎菜穂子は、一度聴いただけで「寄る辺なき者への挽歌」を覚えてしまったに違いない。

なぜ、横澤かなえが伊崎菜穂子を殺さなければならなかったのか。

嫉妬――

美山良則からの電話によると、横澤かなえは、コンサートの後、泣きながらバンドのメンバーに告白したという。

悩みながら、苦しみながら、必死に作り上げた自分の「泣ける」曲。それを、  
いとも簡単にわずか一晩で完璧に覚えて、うつくしい声で歌ってみせた伊崎菜穂  
子。その姿に、強烈な嫉妬を覚えたのだという。「殺す」という行為に、横澤か  
なえは何らの躊躇も恐怖も後悔も感じなかったらしい。

なぜなら、伊崎菜穂子は「障碍者」だから——  
いても、いなくても、誰も哀しむ者などいないはずの存在だったから——  
横澤かなえは、単に観客を「泣かせる」ためだけに、「寄る辺なき者への挽歌」  
を書き、歌った。

しかし、コンサートのいちばん最後に美山が言った言葉に、はじめて横澤かな  
えは衝撃を受けた。

——僕らに音楽の楽しさを改めて教えてくれた人。

そして、多くの人が送った拍手。

その瞬間になって、ようやく彼女は知ったのだ。この拍手は、自分が受けるべ  
きものではない、という事実を。

彼女はようやく気づいた。己の罪を。伊崎菜穂子というひとつの命を。

もしも、横澤かなえと伊崎菜穂子の出会いが異なる形であったならば——二人  
の関係はもつと違っていただろう。今度の悲劇は起こらなかっただろう。

——よるべのないあなたよ

「本当に寄る辺のなかったのは、横澤かなえさん本人だったのかもしれない」

私はつぶやいた。

江美は、いつまでも泣いていた。

「あるひとつの死」完